

造形ワークショップ実践報告

保育実践につながる「場」としての造形ワークショップ 2

江村 和彦

I 研究の背景

平成 20 年に『幼稚園教育要領』および『保育所保育指針』が改定された。特に保育所保育指針では年齢に応じた領域別の内容が詳しく設定されていたものが、改定後はそれらを設定しないことにより幼稚園教育要領に近づいた形となった。その中で領域「表現」では「感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ」など、日常の中で子どもたち自らが感性を育てるような環境を準備することが求められている。現在の保育者養成のカリキュラムのなかには、必須科目として表現領域の音楽、体育、造形がそれぞれ位置づけられている。しかし音楽・体育・造形、どの分野においても、授業時間の中で十分な知識や技能を習得するためには十分な時間が確保できない。また学生自らが感じたことや考えたことを自分なりに表現する力をつけたうえで、子どもたちに表現する楽しさを伝えるように力をつけることが望ましいと考える。例えば造形表現においていえば制作や描画活動の授業の中での教員から伝えられる言葉と、保育現場で保育者が子どもたちに伝える言葉とでは大きく差がある。

筆者はその差を理解し対応していく力をつける手段として、造形ワークショップを保育者養成校の学生とともにを行い、子どもたちとの関わり方を実習やボランティアとは違う形で経験を積ませた。その内容を「保育につながる『場』としての造形ワークショップ」にまとめた。造形ワークショップの実践について片岡（2006）は、遊び場としての児童館に着目した。児童館において絵の具を使った造形ワークショップを行い、子育て支援活動の一環としての必要性や美術教育としての可能性を述べている。また矢野ら（2008）は「こどもアートキャラバン」を実施し、大学と地域と行政との連携の重要性とその手立てとして造形ワークショップを挙げている。陣内ら（2009）も造形活動を子育て支援活動としてとらえ、3年間の幼稚園での活動の中で参加者への効用だけでなく、学生が子どもや保護者との関わり方を学ぶ機会になり継続して活動した意義を述べている。また問題点として幼稚園では参加者が固定されて人数が増加しなかったことも挙げている。

これらを踏まえ、本研究は地域の遊び場として、また保育者養成校の学生にとっての学びの場

としての、児童館での造形ワークショップの実践に着目する。本研究のねらいは2つの点にある。ひとつは学生が素材、年齢、人数や季節等に応じた様々なワークショップを継続的に経験すること。もうひとつは児童館に集う親子や小学生たちは造形的活動のなかで年齢も幼児期だけでなく小学生の活動を体験したり、未就園児の親子の姿を観察し保護者が児童館のワークショップに何を求めているのかを調査することである。

II 研究の方法

身近な素材を使った造形ワークショップを企画し0市内のF児童館、H児童館において定期的を実施する。造形ワークショップには保育者養成校の学生が参加し、小学生対象のワークショップと未就園児とその保護者対象のワークショップを展開し、保護者からアンケートを取り満足度と今後のワークショップの希望調査をする。学生からは実践後の感想、振り返りをする。

III 造形ワークショップの意義

1 地域と学生をつなぐ場

保育者という仕事は保育する乳幼児に対して生活の基盤を作るための援助をするだけでなく、その保護者たちとも適切に対応していかなければならない。保育者養成校で学ぶ学生にとって保育園、幼稚園での実習では、子どもの発達や保育者の役割などを保育現場の様子を観察したり実践することで学ぶ場所である。学生はそれらを観察し、部分的に実践を積みながら成果としてまとめることに主眼を置く。そのため実習期間においては保護者の様子などを知る機会も少ない。そこで筆者はさまざまな子どもやその保護者とともに活動する中で、相互理解を深めていく場としての児童館は重要な存在であり、そこで造形ワークショップを実践することは異年齢の交流を図ることができるうえでも意義がある。

2 保育実践につながる企画力・実践力を養う場

保育士養成のカリキュラムの中に位置づけられている造形の授業で展開する内容は、将来保育現場で使うだろうさまざまな素材に触れたりしながら、学生自身の作品として制作手順を覚え作品制作をする。しかし保育現場においてそれらを実践するための指導法を教えることは授業の中に十分確保されていないことがある。造形ワークショップは、企画を立てて準備を進め実践していくかを学生自身が指導する立場として考えていく機会となり、企画力、実践力を養う場として十分な場面であると考えられる。

ただしワークショップという形はあくまでも教育、指導するという立場というより、活動を援助する役割＝ファシリテータという立場をとることが重要である。指導者が目指す出来上がりではなく、活動をしている子どもやその保護者らが自主的に活動に参加することを後方支援する立場であるということを忘れてはならない。高橋（2012）は造形ワークショップを行ううえで必要な能力として3つの力を挙げている。①企画力 ②組織力 ③記録力である。①の企画力は文字通りワークショップを構想し組み立てる力である。そのためには実践者自身の経験と想像力が必要となる。子どもたちが興味を示し活動に幅を持たせられるような企画を作る力が必要である。②の組織力はワークショップを円滑に進めるためにそれぞれが役割を担ってワークショップを進

める必要がある。そのためにも参加するメンバーや会場のスタッフと調整を重ね、計画を練っていく必要がある。③の記録力は記録を取って残す力である。ワークショップ当日の様子だけでなく、準備をしている場面や材料も画像や数字などで記録しておくことが重要である。

3 0市の児童館での取り組み

0 市内の児童館では指定された曜日の午前中に開かれる「子育てサロン」では未就園児とその保護者が訪れて遊ぶ空間になっており、そこで求められる造形ワークショップとは親と子と一緒に作って遊ぶことができることと親が楽しんで制作することの2点ができることが求められている。また小学生対象の造形教室では小学校から帰宅して児童館や放課後児童クラブに遊びに来る児童につくって遊ぶ楽しさを知る工作教室として位置づけられている。その企画の一部を筆者と保育士養成校2年生で担い、造形ワークショップ（親子工作教室・こども造形教室）として展開した。ワークショップのねらいは学生が子どもたちや保護者たちとの交流により理解を深めることと児童館の職員の活動内容を把握し子どもの活動を援助する方法を観察することにより、学生は実践を重ね、さらにコミュニケーション能力を高めることにある。

IV. 実践報告

1 実践内容

造形ワークショップの対象は0市に9か所設置されている児童館のうち2か所の児童館（F 児童館・H 児童館）である。実践者は筆者と保育者養成校の学生らで構成する造形ワークショップチームである。今回報告する実践期間は2012年2月から2013年3月である。ワークショップチームは月に一度F 児童館・H 児童館に赴きワークショップを行った。ワークショップの種類は以下の2種類である。

(1) 「親子造形教室」

対象→未就園児とその保護者、時間→午前10時30分～11時30分

内容→児童館が開催している親子サロンにおいて親と子の造形体験、造形遊び

(2) 「子ども造形教室」

対象→小学生、時間→午後4時～5時

内容→放課後児童クラブ「造形教室」において作って遊ぶおもちゃなどをつくる

2 実践内容の計画・準備

実践内容については対象によりつくるものや制作時間を考慮して計画した。内容については自由制作ではなく見本を提示して同じものを一人ひとつ作るという形式で計画した。筆者が監修して学生が計画・試作をして制作体験してから、実践に向けた準備などを行うこととした。「親子造形教室」では主に制作するのは保護者である大人が短時間でつくれるものを計画した。対象は子どもや3歳以下の幼児であるため、カッターなどは使わずはさみやのりの使用もわずかでつくることができ、飾るオーナメントやつくった後に遊べるおもちゃづくりを計画した。制作時間は、幼児の集中力を考え30分程度と設定した。そして季節や行事を意識したものも取り入れるよう

にした。

「子ども造形教室」では小学生対象としたが、およそ小学3年生の児童がつかれるように計画した。制作するおもちゃは、つくって遊べるものと飾って楽しむものとした。「親子造形教室」も「子ども造形教室」も制作に必要な材料については、牛乳パックなど身近に手に入るものを中心としながらサンプルを事前に児童館側に提示して、必要な材料を準備しておいてもらう形をとった。また道具は児童館のものを使用しながら、数量不足や児童館にないものは筆者らが準備して持ち込んだ。

表1 造形ワークショップ実践計画スケジュール

2012年	F 児童館	H 児童館
2月	17日 切り紙モビール	×
3月	22日 AM ガラガラ	×
4月	×	×
5月	29日 AM 切り紙モビール	×
6月	13日 PM 紙皿風車	5日 PM 紙皿風車
7月	3日 PM レインスティック	2日 AM モビール
8月	6日 PM キラキラシャボン玉	28日 PM 紙粘土と木の動物
9月	3日 AM ひっぱるおもちゃ	11日 AM 引っ張るおもちゃ
10月	15日 AM ペットボトル人形	16日 PM レインスティック
11月	28日 PM クリスマスツリー	5日 AM 万華鏡
12月	17日 AM ヘビのよろよろ	11日 PM クリスマスツリー
2013年1月	21日 AM ペットボトル人形	×
2月	19日 AM おひなさま	エコバックづくり
3月	×	5日 牛乳パックの車

3 実践概要

(1) 「ガラガラ」

日時：2012年3月22日 AM10時30分～11時30分

場所：F 児童館

対象：未就園児の保護者

ねらい：筒の中に小石やビーズを入れることで音色を楽しむおもちゃをつくる。親子で協力してつくり乳幼児が振ったり転がしたりしながら楽しめるものにする。

材料：ひとり分 トイレットペーパーの芯（1個） ・ペットボトルのふた（2個） ・ビニールテープ、ビーズ・小石・モデルガンの弾・モール・丸い事務シール・紙テープ

道具：はさみ ・サインペン

手順

- ① トイレットペーパーの芯を盾に半分に切り丸めて片方の端にペットボトルのふたをはめる。
- ② はめた部分をビニールテープで留めて底をつくり、そこへビーズを入れる。
- ③ もう片方の端もペットボトルのふたをはめてテープで留める。
- ④ 蓋の間をいろがみやシールで飾りをつけて完成。

※注意点

※筒をたてに振ってマラカスのようにして遊んだり転がして音が鳴ることを楽しむ。

※ペットボトルのふたを車輪のようにして転がして遊ぶ。



芯にビーズを入れる



「ガラガラ」を転がす



「ガラガラ」ができたよ

(2) 切り紙モビール

日時：2013年5月29日 AM10:30~11:30

場所：F 児童館

対象：未就園児とその保護者

ねらい：未就園児を持つ親に対して家で飾れるもの。技法的に差がなくきれいな模様のオーナメントを作る。

①用意するもの

材料・いろがみ 一人5枚程度 ・毛糸

道具・はさみ ・スティックのり・鉛筆 ・延長コード・ラミネーター 2台 ・ラミネートシート A4 ・穴あけパンチ・切り紙切り方図

②事前制作

当日ワークショップに参加する学生に対して事前学習を行った。切り紙にするための折り方、乳幼児がそばにいるのではさみの使い方などに注意するなどを指導した。

③前日の準備

- ・見本となるラミネートしたモビールをつくる。
- ・切り紙のための折り方見本をテーブル分作成する。

④制作手順

- ・いろがみを配り6つ折りする（折り方見本を見せて説明する）
- ・切り方図を見ながら鉛筆でデザインを書き入れてはさみで切る

- ・開いた形を見ながら大小の切り紙を楽しむ
- ・各々ちょうちょやどうぶつの形に切ったり、サインペンで絵を描いたりする
- ・ラミネートしてから切り取り、パンチで穴を開けてタコ糸で通しつなげて完成する

※注意点

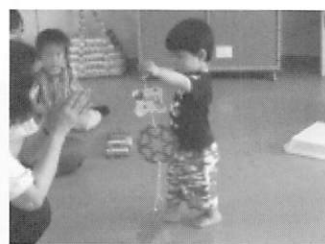
- ・幼児がはさみに触れないようにする。
- ・ラミネートする前の切り紙を幼児が壊さないようにする。
- ・幼児がラミネートの機械に触れないように注意する。



切り方を説明する



ラミネートして切り分ける



つなげて完成する

(3) ペットボトルのおもちゃ

日時：2012年10月15日 AM10時00分～11時30分

場所：F 児童館

対象：未就園児を持つ保護者

ねらい：親子でペットボトルのデデン太鼓をつくる。象・ウサギ・いぬなど親しみやすい動物のおもちゃを作る。シールを貼ったり、サインペンで色づけしたり親子でものをつくる体験をする。

材料：ペットボトル 500ml の空き容器（炭酸飲料のもの）・トイレットペーパーの芯・ひも 20cm・ループエンド（手芸用の留め玉）・色画用紙・動物の耳などの型紙・丸い事務シール（白）・ビニールテープ（赤・黄色・青・ピンクなど）

道具：はさみ・クリップ（大）・サインペン・セロテープ

事前準備：炭酸飲料のペットボトルの底の部分をカッターナイフで切り取り、ビニールテープで保護しておく。ペットボトルの切り口から3cmの場所に目打ちで1cmの穴を開けておく。ひもの先に括り付けるクリップを伸ばしておく。

制作手順

- ① トイレットペーパーの芯を縦にはさみで切り丸めて、ペットボトルの口に3cmほど差し込みビニールテープで巻きながら留める。（トイレットペーパーの芯の部分が隠れるくらいに止める）
- ② ペットボトルにひもを通す（クリップをセロテープにつけて紐に巻きつける）
- ③ ひもの両端に止め玉を通し結んで留める。

【実践報告】造形ワークショップ実践報告

- ④ ネコやウサギなど動物のパーツを画用紙でつくりビニールテープで貼り付ける
- ⑤ 丸い事務シールで目を描いて貼り付けて完成。左右に回しながら鳴らして遊ぶ



制作全景



振って遊んでみる



うさぎのできあがり

(4) 万華鏡

日時：2012年11月5日 AM10時30分～11時30分

場所：H児童館

対象：未就園児とその保護者

ねらい：筒の中を覗くと不思議な模様に変化するおもちゃを保護者と一緒につかって楽しむ。

材料：紙管 ・ アクリル製鏡・クリームケース・セロハンテープ・ビーズ・スパンコール
・ のぞき穴用紙 ・ 紙テープ・丸い事務シール

道具：はさみ・両面テープ・木工用ボンド・つまようじ

事前準備

- ・ 紙管を18cmの長さに切る（のこぎりで切る）
- ・ 紙管の中に入るようにアクリル製鏡を切り分ける。（幅2cm x18cm 1枚幅2.4cm x18cm 2枚）
- ・ 鏡は貼り付け用の紙テープを切り分ける。（1つにつき幅3cmのテープを9枚。人数分）
- ・ のぞき穴用紙をつくる（黒画用紙の中心にパンチで穴を開ける）
- ・ クリームケースのふたと容器の底に両面テープを貼っておく

制作手順

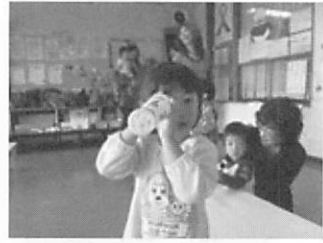
- ①紙管の整った面の方ののぞき穴用紙を木工用ボンドで貼る。（穴が真ん中になるようにする）
- ②アクリル製鏡の保護シートをはがし内側に鏡面を向けて三角形になるように組み立てる。
- ③クリームケースの両面テープをはがしビーズやスパンコールを貼っていく。容器のふたを閉める。（容器の半分ほどビーズをいれるとよい）
- ④紙管ののぞき穴と反対側から組み立てた鏡を入れてふたをするようにクリームケースを載せてセロハンテープで巻きつけながら留める。（クリームケースの底を紙管につけるように接着する）
- ⑤のぞき穴用紙のはみ出た部分を切り取り、紙管の白い部分に紙テープや丸い事務シール、サインペンなどで飾り付けをして完成する。



制作全景



ビーズを選ぶ



万華鏡を覗いてみる

(5) クリスマスツリー

日時：12月17日 PM4時00分～5時00分

場所：H 児童館

ねらい：色画用紙を幾何学的に折ってクリスマスツリーをつくる

材料：色画用紙（緑、茶）・星型に抜いた色画用紙・ビーズ・スパンコール・プリズムテープ

道具：はさみ・木工用ボンド・両面テープ

事前準備：色画用紙を寸法通り切っておく。緑 10 cm x 20 cm（大） 8 cm x 16 cm（中） 6 cm x 12 cm（小） 茶 7 cm x 14 cm ひとりそれぞれ1枚ずつ切っておく

制作手順

- ①大型見本で折り方を説明する
- ②大きい画用紙から折り目を固定するために両面テープで留めていく
- ③大、中、小の順番に挟み込んで両面テープで貼り付ける
- ④星をツリーの頂点に接着しプリズムテープやスパンコールでツリーの飾り付けをして完成



大きめの紙で見本を見せる



丁寧に折り方を説明する



ツリーの完成

(6) ニョロニョロヘビ

日時：2012年12月22日 10時30分～11時30分

場所：F 児童館

対象：未就園児とその保護者

ねらい：身近な牛乳パックを使いゴムのばねを利用した干支のヘビをつくる

材料：牛乳パック・輪ゴム・丸い事務シール

道具：サインペン・はさみ・クレパス・布ガムテープ（赤・水色・黄色・ピンク）

【実践報告】造形ワークショップ実践報告

事前準備：牛乳パックは切り開いておく・4.7 cm x15 cmの型紙をボール紙でつくる

制作手順

- ①開いた牛乳パックを二つ折りして型紙をあてて4等分にサインペンで線を引き、はさみで切る。
注ぎ口と底は切り落とす。
- ②パックの表面を裏側にしてガムテープで留めて四角い枠を4つつくる
- ③ガムテープで留めた面の隣側の上下5mmにはさみで切りこみを入れる。4つの部品すべて
- ④四角い枠の外側から切込みに輪ゴムをひっかけてパネとする。4つの部品すべて
- ⑤4つの部品をガムテープで留める。ガムテープで留めた部分同士で接着しないように方向をそろえろるとよい。
- ⑥どちらか頭を決めて丸い事務シールで目を描く。白い体にサインペン、クレパス、色のついた丸い事務シールで飾り付けをして完成。
- ⑦遊び方：輪ゴムを延ばすようにへびをたたんで離すと飛び上がる。また尻尾を持つとクネクネ、
によろよるとへびのように動く。



制作風景



シールを貼る



へびのできあがり

V. 分析

1 アンケート結果

(1) 各造形ワークショップの参加者と満足度

「親子造形教室」については制作後アンケートを実施した。結果は以下のとおりである。「モビールづくり」2012年2月20日実施。回答12名。年齢25～30歳1名、30～35歳8名、35～40歳2名。満足度では66%の人がとても満足、満足が33%と高い評価を得た。「ガラガラづくり」2012年3月22日実施。回答、13名中10名回答。年齢25～30歳1名、30～35歳6名、35～40歳3名、40～45歳1名。満足度では70%の人がとても満足、満足が30%と高い評価を得た。このような制作する体験活動がこれまで行われてこなかったことがその要因とも思われる。「ペットボトルのおもちゃ」2013年1月21日実施。回答17名。年齢20～25歳1名、30～35歳5名、35～40歳9名、40～45歳1名。子どもの年齢は1歳1名、2歳8名、3歳6名であった。満足度は、とても満足82%、満足18%と高評価を得た。子ども自身でどうぶつ目の目や耳を描くなど楽しんでつくり、出来あがったおもちゃを振って遊ぶ姿が見られた。「ニョロニョロへび」F児童館2012年12月22日実施。回答9名。年齢25～30歳1名、30～35歳8名。満足度 とても

満足 77% 満足 22%と高評価を得た。保護者と子どもが楽しそうにつくる姿が見られた。出来上がったおもちゃを自慢げに見せたり自分なりに飛ばして遊ぶ姿が見られた。「牛乳パックの車」2013年3月回答10名、年齢20～25歳1名、25歳～30歳1名、30～35歳5名、35～40歳5名、40～45歳2名。満足度：とても満足100%と高評価を得た。

(2) 今後やってみたいこと (親子造形教室)

①保護者自身でつくるもの

- ・かわいいもの ・デコレーション (シリコンでつくるお菓子など) ・夏休みの自由研究
- ・動くペンギン ・紙コップのカエル ・動物の折り紙 ・ぬいぐるみ・切り絵・行事かるた
- ・飛び出す絵本 ・スクラップブック・テープクラフト・造花づくり・竹とんぼ ・編み物

②子どもと一緒にやってみたいもの

- ・口に入れても安全な粘土遊び・ぬいぐるみ・絵を描く・簡単万華鏡・毛糸の工作・小麦粘土
- ・手作りパズル・動きのあるおもちゃ・貼り絵・動物模様のモビール・おりがみ・絵の具遊び ・箱を使ったのりものづくり。

2 子育てサロン参加者の要望

未就園児の保護者の場合、満足度は高い結果となった。それはまず家庭内で工作をする時間的余裕が持てない事があげられる。もともと家庭の中でものをつくる習慣がないために楽しめたという回答があった。制作はほとんど保護者が中心で作り、シール貼りや油性ペンでの色塗り等を幼児が行った。遊ぶおもちゃを中心に企画を立てたが幼児が振ったり投げたりしても壊れにくい、また修復が容易なものが適していることが分かった。幼児は保護者と離れたくないため、腕や肩などに捕まっている場合がある。その際に作業の妨げにならないように、幼児の注意を母親から逸らす必要がある。今後やってみたいことにはシリコンを使ったデコレーションおもちゃやテープクラフトなど自分では容易に取り組めないものや、スクラップブックや編み物など保護者自身が楽しむものを求めている傾向にあると考えられる。子どもと一緒に作りたいものはねんど、おりがみ、絵の具遊びなど基本的な造形あそびを求める傾向にある。

3 小学生の反応

小学生の場合、未就園児よりは集中力がありじっくりとつくることができた。初めに完成サンプルを見せて始めることやなぞかけをして興味をひかせるなど、実践によって多様な説明が必要なことも学生は学んだようだ。ただし学年の差により制作進度が異なるので注意しなければならないが、その点を補うように学生が児童に援助するような対応力を養う機会としたい。

4 学生の様子

今回、ふたつの児童館で合計20回の造形ワークショップを行った。学生は自分の役割に対して真面目に取り組んでいる様子だった。小学生には子どもの目線まで姿勢を下げたてわりやすく制作できるように活動援助をしていた。クリスマスツリー制作に関しては試みとして学生が講師を務めた。ただたどしい部分もあったが、説明を十分にできていた。特に大判の色画用紙を使つての説明では小学校低学年でもわかるようなたとえをして折り方を説明していた。事前に何度も

試作をしていたため制作の流れを把握していたことが活動の援助としてスムーズなものになったと言える。活動の中では制作内容を十分に理解できていない学生もあり、小学生に適切に説明できていない場面もあった。基本的な言葉遣いや注意しなければならない時の毅然とした態度などは児童館の職員に指導される場面もあった。

VI. 考察

就園未満児の親子教室では親から離れない子どもも多く、学生たちはなかなか幼児とのコミュニケーションをとる機会はつくれなかったが、幼児の年齢や月齢による発達段階や保護者の子どもに対する言葉かけなどを直接見ることができる機会となった。また制作を援助する際に学生よりも年長者につくり方を教える時の言葉遣いを注意する経験になった。これは実際の保育所・幼稚園での保護者対応の経験になったと言えるだろう。またこれまでのワークショップに参加した学生は振り返りから事前準備の必要性を感じていた。クリスマスツリーの折り方などは小学生にわかりやすいたとえを挙げながらスムーズに説明ができていたが、道具の不足や材料の質の違いによる作品の出来栄から連絡の徹底やサンプルの重要性を痛感していたようだ。

高橋陽一は著書『造形ワークショップを支えるファシリテータのちから』の中でワークショップを次のように定義している。「参加者が主体となった教育であり、その過程や結果を参加者が享受することを目的とするが、その知識や技術の習得や資格の取得などを目的とせず、さらに準備して見守るファシリテータは存在しても、指導して評価する教師が存在しないもの。」つまり指導する立場の人間が参加者に対して一方的に作り方遊び方を教えるのではなく、同じ空間で一緒に考えながら参加者が必要な時に援助をして制作過程から出来上がって遊ぶところまでを見守ることが重要である。保育現場に求められる造形活動も指導して評価をしないという点において同じことが言える。

今回の一連の造形ワークショップはその目的を達成できなかった。その理由は以下の3つである。①ワークショップを教える側と教えられる側の構図であり、ファシリテータの役割には至らなかった。それは児童館側の一人ひとつ制作をして遊ぶという要望も反映されたからである。②児童館活動の参加者の定数確保が難しいため計画することが困難である。夏休みなど児童が時間に余裕をもって遊ぶことができる期間ならば計画も可能だと言える。③学生の造形活動経験やワークショップの企画経験が少なく活動の円滑な運営ができなかったことである。造形ワークショップの前に試作をするだけでなく、当日の流れについても一部の学生しか把握できていない状況もあった。②も含め活動の規模を大きくして長期的な活動計画や役割分担の中で造形ワークショップを実践していくことが重要であると言える。

造形ワークショップの最終的な目標は作品の完成ではなく制作行為そのものを楽しむことにある。今後は造形ワークショップの回数を重ねながら児童館との認識を共有して、作品という結果を残さない活動そのものが重要であることを学生自身の意識に浸透させていくことを重要だと考える。まずは学生自身がつくって遊ぶ楽しみを実感することである。そのうえで基本となるワー

クシヨップをくり返し経験しふりかえり、子どもたちにとって楽しく好奇心をくすぐる企画をつくりだす工夫が必要である。そのために A4 サイズの造形ワークシートを作成することとした。

(表 2)

表 2 造形活動ワークシート

造形実践ワークシート		
場所		
実践者名		
日時	年 月 日 ()	
時間	時 ~ 時	
タイトル		
ねらい		
対象年齢	人数	
素材分野		
用意するもの		
事前準備		
活動の流れ	子どもたちの様子	スタッフの援助、指導
ふりかえり		
反省点		

今回の実践を継続していく中で計画と振り返りするための専用のフォーマットを作成する。これに学生が書き込むことで問題を洗い出し次回の活動に生かすようにする。デジタルカメラなどでも記録を取り今後の活動のよりどころになるように資料化していくことも意識して行っていかなければならない。児童館は小学生だけでなく子育てサロンに通う未就園児やその保護者と接することができる。保育者を目指す学生にとってこの場を保育実践の機会とできるよう児童館と連携を深めていきたい。

【実践報告】造形ワークショップ実践報告

【引用文献】

- 1 高橋陽一 前掲書 p195

【参考文献】

- 江村和彦 2012「保育につながる『場』としての造形ワークショップ」
- 片岡杏子 2006「地域コミュニティ施設における造形教育の現状と課題～児童館の造形遊びワークショップを通して～」美術教育学 美術教育学会誌 第27号 p135-p146
- 矢野真・高垣マユミ・田爪宏二 2008「造形ワークショップを通じた大学と行政、地域の連携による子育て支援に関する実践研究」鎌倉女子大学学術研究所報 第8号 p45-p56
- 陣内敦・松本千尋 2009「造形を通じた子育て支援活動Ⅰ～のびのびワークショップ3年間の記録～」長崎短期大学 研究紀要21 p63～71
- 高橋陽一 2012 「造形ワークショップを支えるファシリテータのちから」武蔵野美術大学出版局